



特集 竜飛ぶまち

河之内には竜がいる。そんな噂があるほど竜に縁のあるまち。それが河之内地区。

12年に一度

2024年の干支は辰。河之内地区には竜にまつわるものが多く残されている。地区を流れる表川、雨乞い竜の伝説がある雨滝、土佐まで通じる窟に竜が棲むと言われる窪野淵、上流には唐岬の滝や白猪の滝など竜と縁深いものが今も地元で言い伝えられている。

「これほど竜に縁がある地域なので干支の辰に併せ何かしたい。たくさんの人に興味を持ってもらえることができれば」と惣河内神社司の佐伯敦さんは河之内の人たちに伝えた。

初めての「しめ縄竜」

12月16日、惣河内神社に大きな稲わらでできた竜が展示された。全長は約12m、胴回りは70cm、背には米俵3体、左手は米の房を持ち、虹色の宝珠を啜え、尻尾に

は菰があしらわれている。

「初めての試みで、大きな縄をなう知識がない。毎年、小さなしめ縄は作ってきたけれど、大きなものは作ることがないので試行錯誤を重ねました」と河之内地区の浅野和雄さんは話す。

大きな竜をつくるために、東谷小学校で稲刈りをしたときの稲わらや地元の米農家から集めたものなど多くの稲わらを公民館に集めた。「せっかくなら丈夫に綺麗に縄をなっていた方がいい。一般的なしめ縄は2本でなっていますが、竜づく

りでは3本でなうことになりました」と浅野さんは話す。

竜づくりで使う縄は1本でもかなりの長さで厚みがあり、「1本作るのに5人掛かりで始めは1日かかりました。でも、3本目を作る頃には半日でできるようになっていました。何事も経験ですね」と浅野さんは笑みを浮かべる。

久万高原町の人形作家林智美さんが作った竜の顔は鋭い目つきが目が印象的だ。「目はおたまに紙粘土を付けて表現しました。身近なもので工夫して作った顔



竜が飾られている惣河内神社。夏には紫陽花、秋には紅葉と四季を楽しむことができる

「河之内はおいしい米の産地なので稲わらを使いました。近年は米農家の後継者不足や高齢化などで生産量が年々減少しています

が、稲わらで縄をなう伝統文化を次世代に残していかなければなりません」と佐伯さんは前を見つめる。

12月16日、東谷小学校の全校児童や愛媛大学の学生などが河之内公民館に集まり、竜づくりの最後の仕上げが始まった。



惣河内神社宮司 佐伯 敦 さん
さいき あつし

想像より遥かにいいものができました。公民館の集会で、竜のまちおこしをしたいと伝えたときに、縄で竜を作ろうと地元の人たちがたくさん動いてくれました。見た人に河之内の熱意が伝わり、住んでみたいと思う気持ちになってくれれば嬉しいです。

特集 竜飛ぶまち



河之内地区 浅野 和雄 さん
あさのかずお

顔と体が繋がったときは感動しました。特に3本締めのところや体と頭を接続するところが大変でしたがなんとか形になりました。一番のこだわりは「米」。米の産地河之内ならではの材料を使ったり装飾品などをあしらったりして細部までこだわり、米に対する思いが詰まっています。



地元の竜づくり

大きな竜を完成させるにはたくさんの人の力が必要。集まったのは50人もの人たち。資源も人を繋ぐ力も河之内にはあった。



東谷小学校6年生 小倉 芽依 さん
おぐら めい

しめ縄竜づくりは私にとって貴重な経験になりました。体を編むときには地元の人たちとみんなで協力した結果、意外とスムーズにできて楽しかったです。もし次に地域で何かする機会があれば参加したいと思いました。



久万高原町の人形作家 林 智美 さん
はやし さとみ

いつもは小さい人形を作っているのでもこれほど大きいものを作るのは初めてでした。話をいただいたときの地域の皆さんの表情はいきいきしていて、ぜひやってみたくて心動かされ、今回参加させてもらいました。たくさんの人に見ていただけたら嬉しいです。

「最後はみんなで完成させていきましょう」と製作当日、12mの固く重いしめ縄を50人が抱えた。「次はみんなで転がして、細かなわらを落とすよ」と浅野さんが声を掛けると、子どもたちは笑みを浮かべ転がしていく。「作業自体が大掛かりなものになるので、竜づくりの1週間前には地元のみんなが集まってシミュレーションをしました。当日はたくさんの方が集まってくれたので準備をしつかりしていた甲斐がありましたね」

小学生たちも製作に入り、縄ないを手伝ったり、竜の胴部分のわらくすをハサミで切り落としたりした。「完成後、どれだけの人が見に来てくれるかは分かりませんが、できるだけ整えておきたいです」と地元の人たちは話す。竜づくりから約3時間後、最後は全員で竜を持って神社の本堂までの階段を登り、しめ縄竜を持ち運ぶ。飛んでいる竜をイメージして、胴体は本堂の柱に括られて展示されている。参加した人は完成した竜を見上げ、達成感の笑顔に満ち溢れていた。

「12年に一度だからできることなんよ」と地元の人たちは笑う。接続部分などが見えないように手作りの菰で隠したり、細かな工夫を感じられる竜。「完成の日が近づくとつれ、毎日公民館に足を運び、微調整を続けてきました。毎日見ていると気になるところが出てくるんですよ」と浅野さんは笑う。「誰かが何かをやりたいと言うとみんなが協力して叶えてくれる。指揮をする人、形にしてくれる人が河之内には揃っています。河之内の人たちだからしめ縄竜づくりができたと思っと思っています」と佐伯さんは話す。

完成したしめ縄竜は惣河内神社の本堂で見ることが出来る。「12年後はみんな80歳超えるかあ。みんな集まれるかな。それまで頑張って生きるといかなあ」と河之内の皆さんは完成したしめ縄竜を見上げて笑い合う。